

## 要旨

### コロナの影響から考えるこれからの日本映画の歴史

まず初めに、今回この本論文で解き明かしていききたいことを明確にしていききたいと思う。本論文では、これまでの映画の歴史や、興行収入、アニメ映画と実写映画の上映数など、さまざまなデータを基にして、現状のコロナ禍から今後の日本映画の変化のありようを推察し、解き明かしていこうという試みである。その検証をしていく前に、私が今回、この研究を卒業論文の題材とした理由についても語っておこうと思う。何故私が本論文の題材に映画を選んだかだが、その理由は三つほどある。

まず一つ目が、これは単純に私が映画という文化そのものを愛しているからである。私は月に映画を十数本見る程の映画好きであり、これまでに様々な映画を見てきた。今まで映画を見てきた本数は、並大抵の人には負けないだろうという自負すらある。そんな私は、当然のように大学では映画論という授業を履修した。そこで学んだことは、これまで漫然と映画を鑑賞していただけの私にとって、非常に興味深く、そして新鮮なものであった。そして、それをきっかけにしてもっと映画について詳しく知りたい、研究したいという思考へと変動していったのが一つ目の理由である。

二つ目は、昨今のコロナ禍による映画業界の不況について、不安に思ったからだ。2020年から2021年へとかけて、コロナウイルスは依然今現在も猛威を振るっている。映画館側は、そんな状況にもくじけずに、席を空けて座るようにする、空調で換気をしっかりとするなどとして、対策を打っているようだが、やはり業績が良いという報告は聞こえない。そんな映画業界全体のことが私は心配になって、今回の論文で今後の映画業界がどうなっていくのかを調べようと思ったのが理由だ。

三つ目、これが最後の理由になるが、それは今が日本の映画業界の転換期にあると私が考えているからだ。そう思うのは単純にコロナウイルスという外的要因もあるが、それだけではない。今の日本の映画業界はアニメ映画が主流になるか、実写の映画が主流になるかの瀬戸際を迎えているように私は思えるのだ。特にそう感じるようになったのは、やはり『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』がきっかけだった。日本映画の興行収入第1位がこの映画に塗り替えられたのは記憶に新しいだろう。この映画の記録的大ヒットを機に、ポスト鬼滅などの言葉も生まれるようになるほどにアニメ業界に影響を及ぼした。私はこの鬼滅の刃の大ヒットをきっかけに、さらにアニメが映画業界に進出してくるのではないかと考えているのだ。そして、その私の考えは正しいのか。それをこの論文内で解き明かしていききたいと思っている。

第1章では、これまでの映画の歴史を振り返り、映画業界の転換期を軸に据えて構成されている。

第2章では、コロナ過での映画の業績のデータなどから現在の映画業界の置かれている状況を分析している。

第3章では、これまでの点を踏まえて現在の映画の売り上げなどからこれから先の映画業界では何がヒットしていくのかを検証していった。

結論としては、今後の日本映画の歴史はアニメや漫画などのサブカルチャー文化と切っても切り離せない関係になっていくだろうという私の結論は揺るぐことはない。だが、アニメ映画が一般的になったとはいえ、いまだに拒否感を示す人たちがいるという事もまた事実である。そんな人たちが当然いるわけで、実写映画もまた決してなくなることはないのだろう。だが、それでいいのである。様々なジャンルの映画があり、万人が楽しめる場所こそが映画館である。アニメ映画一極になってしまっはつまらないだろう。このコロナ禍では、様々な要因が重なり撮影も大変であろうが、私も一人の映画ファンとして実写映画業界の事を応援している。コロナ禍で大変な状況である今だからこそ踏ん張り時であり、勢力を伸ばしているアニメ映画にも負けにくいぐらいの気概で撮影に励んで欲しいと思う。

また、今後のアニメ映画の展望としては、ポスト鬼滅などと呼ばれた『呪術廻戦』の映画が12月24日より公開されるため、その映画が再び大ヒットを巻き起こし、映画業界が盛り上がる事が予見される。その他にも、「ディズニー」、「ジブリ」、「細田守作品」、「新海誠作品」など、これからもヒット作を作り続けていくだろう映画会社や名監督の方々がいる。私が思うに、世間ではコロナ禍で暗い情勢ではあるが、日本の映画の未来は明るいのだと感じている。昔から、弁士の撤廃や角川書店の転換期にも柔軟に対応してきたのが日本映画界である。何十年もの積み重ねた苦労の実績は、今回のコロナウイルスの騒動にも決して負けることはないのだと、今現在も席を一席開けて座るなど、様々な対策をしながらも映画を放映している姿から感じ取れる。いずれまた満員になった映画館で映画を見られる日が来ることを、私は心の底から願っている。そして、その頃には日本映画の歴史に数々のアニメ映画の名前が連なっている事だろう。これからの日本映画の歴史に刻まれるだろう映画が、今この瞬間にも制作されている。それを思うと、これからの人生の中で、また何度か映画の転換期に遭遇するのかもしれないと私は考える。